

## 研究・調査報告書

報告書番号 295	担当 独立行政法人酒類総合研究所
題名 (原題/訳)	
Energy adjustment methods applied to alcohol analyses. アルコール分析に応用できるエネルギー調整方法	
執筆者	
Johansen D, Andersen PK, Overvad K, Jensen G, Schnohr P, Sorensen TI, Gronbaek M	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol. 2003 ;31(1-2):11-7.	
キーワード	
アルコール、エネルギー調節方法、心臓病	
要 旨	
<p>ビールやワイン、スピリッツなどはそれぞれ健康に対して異なる効果を有していることが示唆されている。このような問題を取り扱うときにアルコール飲料のタイプによる差なのか、あるいは他の成分の差なのか、アルコールの摂取量の差なのかを考慮しなければならない。しかし、それぞれの飲料中に含まれるアルコール含量は異なっており、その効果の差を他の成分と分けることができない。栄養疫学的研究においても類似する問題があるが、これらの問題を解決するために現在ではエネルギーの配分、基準値、密度、剰余の 4 つの観点から全エネルギー摂取量を考慮している。そこで本研究では、ビール、ワイン、スピリッツが冠状動脈性心臓病リスクに与える影響について、栄養学的な疫学研究法をアルコールの評価方法として応用し、評価した。被験者はコペンハーゲン市の心臓研究で得られた 14,223 人をランダムに抽出した。評価は被験者に質問票により生活習慣や健康関連事項について答えてもらった。さらに被験者には一週間のビール、ワイン、スピリッツの摂取量を答えてもらった。評価方法としてはエネルギー分配方法、標準方法、密度方法、剰余方法で検討した。</p> <p>その結果、標準方法、エネルギー分配方法の結果からビールとワイン、スピリッツの摂取量と健康の間の関連性が示唆された。またビールの摂取量と心臓病リスクの減少が観察された。しかし、全アルコール摂取量のうちのビール、ワイン、スピリッツの占める割合を密度方法、剰余方法で検討するとそれぞれの摂取量と、心臓病とは関連性が観察されなかった。また心臓病のリスクは一週間 1 回以上のワインを飲む人に比べて、飲まない人ではそのリスクが高くなっていた。</p> <p>以上をまとめると、ビールとワインの摂取者は非摂取者より心臓病になるリスクが減少している。一方、ビールを飲む人以外で一週間一回以上の飲酒はその効果は見られなかった。また、スピリッツの摂取者と心臓病のリスクの間にも関連性は観察されないようだ。</p>	